

日本語におけるとりたて助辞「も」の意味と文法

—「も」と他の助辞との相互承接のしかたを中心に—

The meaning and function of “mo” in modern Japanese

朱 武平

ZHU WUPING

要旨 日本語のとりたて表現には主に2種類の形式があるとされている。一つは「特に、もっぱら」などのような副詞¹によるとりたてで、もう一つは「だけ、ばかり、こそ、さえ」などの助辞によるものである。本稿では、後者のとりたて助辞²を対象とし、「も」をとりあげて考察をおこなう。「も」について、とくに従来あきらかにされてこなかった他の助辞との相互承接の面に重点を置き、実例から確認することができるすべてのパターンと、その出現の傾向について考察する。手元にある資料には限りがあり、十分な結果が示されるとは言えないが、「も」による格助辞、副助辞、係助辞（「も」を除き）のとりたて形式を示し、その文法的特徴をあきらかにするという目的は果たせているだろう。

0. はじめに

とりたて助辞に関して、さまざまな形で研究がなされてきている。それを大きく二つに分けると、ひとつは文法的、形態的に、分布〈distribution〉に従って捉える、いわゆる「副助辞」「係助辞」³としての研究と、もうひとつは意味、機能に注目して、それらを一括して「とりたて助辞」として捉える研究である。前者は、主として山田孝雄1922の分類に従っていると考えられ、後者は宮田幸一1948、鈴木重幸1972、寺村秀夫1991、沼田善子1986などがあげられる。本稿ではとりたて助辞研究の過程として調査した「も」について、とくに格との接続を中心に、その文法的特徴をあきらかにし、今後のとりたて助辞全体の研究の基礎をつくることを目的としている。なお、用語に関しては、「とりたて助辞」という用語に統一し、とりたて助辞の文法的特徴を考察するにあたって、その下位分類の「係助辞」「副助辞」に従う。

1. とりたて助辞「も」の意味と用法

「も」について、寺村秀夫1991は「 X も P 」の基本的な意味は、 X について P を、 P と結びつくものとして X 以外のもの（ $\sim X$ ）があるという影と対比しながらいうことである。（中略）「 X も P 」という文は、基本的には、聞き手が、「 X 」を聞いてすぐ、 X でないものを連想することができる文脈、または状況があってはじめて成立する文である」と定義し、また、「も」は「数量、程度についての評価、その多少、高低を強調する意味で使われる」と指摘している。

沼田善子1986は「人生の季節をも、自然の季節と同じように受け入れる」の「も」について、「自者「人生の季節」をとりたて、他者「自然の季節」と共に、「受け入れる」に対して、肯定している。しかも、自・他の肯定は、含みにおいても、期待という要素はない」と指摘し、このような「も」を「単純他者肯定」の「も₁」とし、「とても楽しい気分で、

話すつもりのないこともつい話してしまった」の例について、「この文は読む人の意外さを誘い、自者が強調されているように感じさせる」と述べ、このような「も」を「意外」の「も₂」としている。また、「その年も押しつまった12月24日の夕方、彼は突然やってきた」の例について、「とりたてる自者に対する他者が、想定しにくい点に特色がある、そして、実際には上例のような「も」が現れる文脈中には、他者が現れない」（中略）、「も」のない直接的な表現に比べて、間接的な柔らげの表現とする効果がある」という意味で、このような「も」を「も₃」としている。本稿では「も」の接続のパターンのみを考察の対象としているので、それぞれの「も」の意味の違いについては稿をあらためたい。

2. 助辞との接続⁴

とりたて助辞「も」の文法的用法、主として他の助辞との接続について考察する。方法としては、小説、雑誌などの文学作品を中心に、おおよそ500近くの作品から用例を収集し、これらの用例を基に「も」と他の助辞との相互承接を以下の格助辞、副助辞、係助辞（「も」を除き他の係助辞）の順に、可能な組み合わせのパターンを割り出し、それを実例から確認できたすべてのパターンとつきあわせ、その出現の傾向について考察する。考察の対象となる助辞は以下の通りである。

- ・格助辞「が・を・に・へ・で・と・から・まで・までに」
- ・副助辞「くらい（ぐらい）・ほど・だけ・ばかり・など・なんか」
- ・係助辞「は・こそ・さえ・しか・でも・まで・なんて」

2.1 格助辞+「も」

格助辞のあとに、とりたて助辞「も」をつけて、とりたて形式をつくることができる。この場合、格助辞+「も」の組み合わせになる。

2.1.1 をも

格助辞「を」+係助辞「も」の形で「をも」になる。

- (1) この建物は一八一四年に出来たラスモヴスキ邸宅で、のち英吉利《イギリス》倶楽部になっていたこともある。露西亜《ロシア》革命の博物館だが、ろしあ共産党の歴史博物館でもあり、同時にまたレイニンの個人博物館^{をも}合わせているのだ。（踊る地平線）
- (2) 私の一生が如何に失敗であろうとも、又私が如何なる誘惑に打負けようとも、お前たちは私の足跡に不純な何物^{をも}見出し得ないだけの事はする。（小さき者へ）

2.1.2 にも

格助辞「に」+係助辞「も」の形で「にも」になる。

- (3) うえの魚のように、彼女はいつまでも花束とともに黙りこくって動かない。何が彼女の脳髓を侵蝕しているのか、私にはよくわかる。東京と東京の持つすべて、日本と日本のもつすべてから時間的にも地理的^{にも}完全に離れようとするいま、私達は急に白っぽい不安に捉われ出したのだ。それはふたりのすこしも予期しなかった、そして、それだけまた自然すぎる、漠然たる憂鬱だった。（踊る地平線）
- (4) 前任の吉田善吾の食卓に、干いわしが出るなどということはあまり無かったが、山本

は土佐のうるめいわしが好物で、美味しい美味しいと言って、艦隊が宿毛湾に入るとたくさん買いこませておき、頭からガリガリ何尾でも食い、みんなにもすすめた。(山本五十六)

2.1.3 へも

格助辞「へ」＋係助辞「も」の形で「へも」になる。

- (5) 大学の仲間が葉山に合宿しているので、そのうち海へも行くつもりです。(青春の蹉跎)
- (6) 一応、話は純子の方へも訊く必要があるというので、明日、谷口が会社へ訪ねて行くことにして話を切り上げた。(女社長)

2.1.4 でも (で+も)

格助辞「で」＋係助辞「も」の形で「でも」になる。例(7)、(8)では、係助辞「も」をとりさって、「舞踊会で私たちのまえにいた」、「技師立会いの下で、重ねて行われた」という文が成立することから、格助辞「で」(場所)＋係助辞「も」の組み合わせであると分析できる。

- (7) ハルビンで同じホテルに泊り合わせ、東支倶楽部の舞踊会でも私たちのまえにいた独逸《ドイツ》人の老夫婦が、こんやも私達の前に掛けている。(踊る地平線)
- (8) 真偽不明のまま、実験は軍令部から山口県徳山の海軍燃料廠に移され、燃料廠の石油技師立会いの下でも、重ねて行われたが、徳山からの報告によると、成功するときもあり不成功に終る時もあり、不成功の場合は、実験者が必ず癩癩の発作をおこして倒れるということであった。(山本五十六)

しかし、「でも」の形では、係助辞「でも」によるとりたて形式も見られる。例(9)、「一緒にビールでものみませんか」の「も」をはずすと、「*一緒にビールでののみませんか」になってしまい、非文になる。なお、例(10)の場合、「いいところでもあり」の「で」は、コンピュータ「だ」の連用形が「も」によってとりたてられていると考えられる。本稿ではこれらを考察対象としないが、とりたて助辞「でも」、コンピュータ「だ」との関係はあらためて問題にする必要があるであろう。

- (9) 「一緒にビールでものみませんか」などと言いたかったのだが、彼女がビールをのまない人だったらそれっきりだし、そういうことを用心して「お茶でも飲みませんか」というのは、喫茶店のつとめから帰ろう、という人に対してずいぶん間の抜けたアプローチではないだろうか、と思った。(新橋烏森口青春篇)
- (10) 「そこが海軍のいいところでもあり悪いところでもあった」(山本五十六)

2.1.5 とも

格助辞「と」＋係助辞「も」の形で「とも」になる。

- (11) 「八・八艦隊ナンか出来ることではないから何かチャンスがあったら止めたいと思っていたのだ。この点では原(敬)首相ともよく話し合ってきた」(山本五十六)
- (12) 私は足かけ八年住み慣れた札幌——極く手短かに云っても、そこで私の上にも色々な出来事が湧き上った。妻も迎えた。三人の子の父ともなった。永い間の信仰から離れて教

会^{とも}縁を切った。(生れ出づる悩み)

「とも」の形では、例(13)、(14)のような引用節について「一とも言う」、「一とも思う」などの形式が多く見られる。この場合、「も」による格助辞「と」のとりたて形式とみてよいかどうか、考察の余地がある。本稿では名詞格のとりたて形式に限定しているの、このような「とも」を考察の対象からはずしている。

- (13) 倒れている相手を殴るなど、もちろん許されていない。明らかな反則である。この時のフォアマンの闘いぶりは、モハメッド・アリが彼を嘲笑する際の格好の材料になった。しかし、リングの上で剥き出しにされたそのような闘う動物の本能こそが、ボクサーをボクサーたらしめている^{とも}言えるのだ。(一瞬の夏)
- (14) 死者は遂に戻らない。そして僕もまた遠からず死ぬだろう。僕は死後に生命があることをも信じないし、死後に藤木の霊魂と再会する^{とも}思わない。僕の死は、僕にとって世界の終りであると共に、僕の裡なる記憶と共に藤木をもまた殺すだろう。(第一の手帳)

2.1.6 からも

格助辞「から」+係助辞「も」の形で「からも」になる。

- (15) 右^{からも}左からも、来たかと思うと、通りぬけてしまう。(運)
- (16) 「どうです風間さん、貴方^{からも}御願ひして見ては」(破戒)

2.1.7 までも

格助辞「まで」+係助辞「も」の形で「までも」になる。「まで」には、動作や状態のおよぶ範囲をあらわす格助辞の「まで」と、極端な例をあげて、そのおよぶ範囲がひろいことを強調する係助辞の「まで」とがある。とくに名詞に後接する場合、両者は形式上同じであるため、判断が難しい。さしあたってここでは、例(17)の「まで」を格助辞「まで」としてとりあつかうこととしたが、さらに詳細な考察が必要だろう。格助辞「までに」の場合も同様である。なお、係助辞「まで」については後に説明する。

- (17) 夜中一時二時^{までも}、友達の許へ、苦い時の相談の手紙なんか書きながら、わきで寝返りをなさるから、阿母さん、蚊が居ますかって聞くんです。(女客)

2.1.8 までにも

格助辞「までに」+係助辞「も」の形で「までにも」になる。

- (18) 結婚^{までにも}種々な事がありました、それ等は煩しくなりますから省いて、すぐ結婚生活の話に入ります。私ははじめは幸福でした。妻の家にもと居た水原の事などは全く忘れてしまった位幸福だったのです。(途上の犯人)
- (19) 今^{までにも}何の不足もなかったのであるが、更に格式があがったので院司も任命され、重い身分になった。気軽に参内もできなくなるだろう、と源氏はそのことを残念に思う。(新源氏物語)

2.2 副助辞+「も」

副助辞のあとに、とりたて助辞「も」をつけて、とりたて形式をつくることができる。

この場合、副助辞+「も」の組み合わせになる。「も」は副助辞のあとにつき、まえに来ることはない。

2.2.1 くらい(ぐらい)も

副助辞「くらい(ぐらい)」+係助辞「も」の形で「くらい(ぐらい)も」になる。

- (20) それから一体、何分くらい立ったのでしょうか？ 私がアトリエのソファに靠れて、彼女が二階から降りて来るのをぼんやり待っていた間、……それは五分とは立たない程の間だったか、或は半時間、一時間^{くらいも}そうしていたのか？……私にはどうもこの間の「時の長さ」と云うものがハッキリしません。(痴人の愛)
- (21) わたしも、その論文、半年ほどまえに図書館で読みました——円盤形ではなくて、タンカー^{くらいも}ある楕円形で、マッハ四ほどで飛び、Vターンしたそうですね。(対州風聞書)

2.2.2 ほども

副助辞「ほど」+係助辞「も」の形で「ほども」になる。

- (22) 私はその港を中心にして三日^{ほども}その附近の温泉で帰る日を延した。(檸檬)
- (23) ある日、穴のふちにかかった、一とかかえ^{ほども}ありそうな灰白色の月を正面に見て(砂の女)

2.2.3 だけでも

副助辞「だけ」+係助辞「も」の形で「だけでも」になる。但し、例(24)のような組み合わせがふつうに成立するかどうか、用例が少ないため、現段階では明確にできない。

- (24) 「金はあるかい？」彼は自分の財布が汽車賃^{だけでも}あやしく、むこうから借りて来るのも厭な気持から、そうKに訊いた。(瑣事)

2.2.4 ばかりも

副助辞「ばかり」+係助辞「も」の形で「ばかりも」になる。

- (25) 係りは自分の名前をなかなか呼ばなかった。少し愚図過ぎた。小切手を渡した係りの前へ二度^{ばかりも}示威運動をしに行った。とうとうしまいには自分は係りに口を利いた。(檸檬)
- (26) そう子供っぽいこと^{ばかりも}言っていられない。いずれ、個人の暴力など、たかの知れたものだ。(砂の女)

2.2.5 なども

副助辞「など」+係助辞「も」の形で「なども」になる。

- (27) 不思議な痺れはどんどん深まって行く。波の音^{なども}少しずつかすかになって、耳に這入ったり這入らなかつたりする。(生れ出づる悩み)
- (28) 酒、女、賭けごと、^{なども}楽しみにはちがいないが、いささか単純だ。(風に吹かれて)

2.2.6 なんかも

副助辞「なんか」＋係助辞「も」の形で「なんかも」になる。

- (29) 下宿といっても、これはごく家庭的な小さな家で、建物はかなり大きかったけれど、止宿人は私たち夫婦きりだったから、食事^{なんかも}家の人とみんな一しょにしたためて、来て間もなくだったが、私たちはもう自分の家のように勝手に振舞ってくらしていた。(踊る地平線)
- (30) 「もちろん、内緒で売っているんでしょう……運賃^{なんかも}、半値ぐらいにして……」(砂の女)

2.3 「も」＋格助辞

格助辞のまえに係助辞「も」をつけてとりたて形式をつくることはできないとされているが、実例には「もが」の組み合わせがみられた。「もが」の場合、例(31)、(32)のような「だれもが」、「どれもが」などの用法がほとんどである。

2.3.1 もが

- (31) 初め、墜ちて黒煙を上げているのは敵機だと、誰^{もが}思っていた。(山本五十六)
- (32) パチンコをしていると、映画が見たくなり、映画を見ていると、本を読むべきだった、と悔んでいた。そのどれ^{もが}嫌いでないのに、何をやっても落ちつかなかった。(太郎物語)

しかし、例(33)「そのいずれの飛行機^{もが}」、例(34)「松原の病院も青山の病院も、いや彼の勤めている松沢病院^{もが}いずれは焼失する」のような用法もみられた。「だれもが」、「どれもが」などについて、高橋太郎1978に、「不定代名詞や数量名詞の基本形の「も」によるとりたて形を語幹にしたものは、ガ格、ニ格、ノ格などになって、曲用へのきざしをみせている」との解釈があることから、用例のかたよりもあるかもしれないが、「だれもが」のような用法と通じるものではないかとおもう。

- (33) もともと峻一は絵が妙にうまく、小学生のころから図画だけは常に甲上ばかりを貰っていた。それが肝腎の受験勉強をそっちのけにし、ありあまる時間をたっぷり使って、マニアじみた執念をこめて描いた絵であったから、そのいずれの飛行機^{もが}必要以上に見事にその本来の形態を再現しているのも当然なことといえた。(楡家の人びと)
- (34) そして昔から自分の病院のことは他人まかせにして何ひとつ積極的な方策をとらなかつたこの楡家の長男は、生れてはじめて思いきった計画を立てた。松原の病院も青山の病院も、いや彼の勤めている松沢病院^{もが}いずれは焼失する日がくるであろう。そうなったら自分は新しい天地を北海道に、農場主としての生活に求めよう。それが楡家をより長く存続させる道なのだ。(楡家の人びと)

2.4 他の係助辞＋「も」

他の係助辞のあとに「も」をつけてとりたて形式をつくることができる。調べた限り、実例には「さえも」「までも」の組み合わせしかみられなかった。よって、「さえ」、「まで」以外の係助辞が「も」のまえに来ることは今のところ考えにくい。

2.4.1 さえも

係助辞「さえ」＋係助辞「も」の形で「さえも」になる。

- (35) 「これで、もうお前たち^{さえも}、畳の上で死ぬことは出来なくなるだろう」(山本五十六)
- (36) 恋のために身をほろぼす事^{さえも}美しい。(青春の蹉跎)

2.4.2 までも

係助辞「まで」+係助辞「も」の形で「までも」になる。先にも述べたが、格助辞「まで」と係助辞「まで」とは外形上同様であるため、とりあつかうには注意を必要とする。例(37)、(38)ではそれぞれ「風紋や足跡を」、「女の内臓が」におきかえられ、とりたて助辞「まで」の用法が作用している点で格助辞の「まで」と異なっている。

- (37) 月が、砂丘の全景を、淡い絹の輝きでくるみ、風紋や足跡^{までも}、ガラスの襞のように浮き立たせているというのに、ここだけは、風景の仲間入りさえ拒まれ、ただむやみと暗いばかりである。(砂の女)
- (38) 彼女の感情も感覚も、何もかもが眠っている。赤い細い血管に包まれたいろいろな女の内臓^{までも}眠っているに違いない。(青春の蹉跎)

2.5 格助辞+副助辞+「も」

格助辞+副助辞+「も」の組み合わせが見られるが、実際の用例では「になども」の一例しか現れなかった。

2.5.1 になども

格助辞「に」+副助辞「など」+係助辞「も」の形で「になども」になる。

- (39) そら古歌^{になども}ござるのう。それもいろいろに言うが、綺麗な花も澤山にあるようなところじゃのう。(道綱の母)

2.6 格助辞+他の係助辞+「も」

格助辞+他の係助辞+「も」の組み合わせが見られる。

2.6.1 をさえも

格助辞「を」+係助辞「さえ」+係助辞「も」の形で「をさえも」になる。

- (40) 責任感や義務感をたくさん持っている人間は、その責任を負いきれなくなったとき、罪を犯してしまう。要するに善良な人間は罪に陥ち易く、悪質な人間は罪^{をさえも}犯さない。……(青春の蹉跎)
- (41) 私にはどんなに好意ある男^{をさえも}恐怖させるところがあるのです。そのために女優になることは断念しなければなりませんでしたが、あなたが私の名を新聞で御覧になったとすれば、それは映画事業に關聯してではなく、遺産相続という恥ずべき、けれど甘い法律手続の客体としてではなかったでしょうか。(踊る地平線)

2.6.2 をまでも

格助辞「を」+係助辞「まで」+係助辞「も」の形で「をまでも」になる。

- (42) 同時に、一方では、あのおそろしい猛火と混乱との中で、しまいまで、おちついて機敏に手をつくし、または命^{をまでも}なげ出して、多くの人々をすくい上げた、いろいろの人々のとうといはたらきをも忘れてはなりません。(大震災災記)

2.6.3 にさえも

格助辞「に」＋係助辞「さえ」＋係助辞「も」の形で「にさえも」になる。

- (43) 登美子は二人の関係について男に責任を負わせようとしているらしかった。寺坂との結婚をことわった事[にさえも]、江藤に責任があるような言い方をしているのだった。(青春の蹉跎)
- (44) アメリカでは、教授は別としても、最優秀の学生が集められているとは限らない。彼ら学生たちが、或るレベル以上に優秀であることは事実だが、同程度に優秀な学生は、アメリカ中の大学に、小さな地方大学[にさえも]、いくらでも散らばっている。(太陽のない季節)

2.6.4 にまでも

格助辞「に」＋係助辞「まで」＋係助辞「も」の形で「にまでも」になる。

- (45) 回診の折り院長は掌から手首[にまでも]及んだ焦色を見て首を傾け、薬湯につけてあとを繃帯することを看護婦に命じた。(草薙)
- (46) アトリエの中はあたかも芝居の衣裳部屋のように、椅子の上でもソファの上でも、床の隅っこでも、甚だしきは梯子段の中途や、屋根裏の棧敷の手すり[にまでも]、それがだらしなく放ったらかしてない所はなかったのです。(痴人の愛)

2.6.5 へまでも

格助辞「へ」＋係助辞「まで」＋係助辞「も」の形で「へまでも」になる。

- (47) 何故《なぜ》ってあの油は、背中の上部の上衣《うわぎ》から、綻《ほころ》びの中のジャケットや擦《す》り破れた肌の上まで、そして縛られた麻縄の表側[へまでも]、ひっこすった様に着いていた。(カンカン虫殺人事件)
- (48) 品川から出た二艘《にそう》の幕府の汽船に押し積まれて静岡[へまでも]つれてゆかれる幾百戸かの家族、それは徳川にしても厄介ものだったに違いない、ついてゆかねばならぬというものの中には、こうした一家もあったのだ。(木魚の顔)

2.6.6 できさえも

格助辞「で」＋係助辞「さえ」＋係助辞「も」の形で「できさえも」になる。この組み合わせについて、本稿では「できさえも」の「で」を格助辞の「で」として扱ったが、この組み合わせはコピュラ「だ」の連用形が「さえ」によってとりたてられているという捉え方もあり、事実そのようにみられる用法もあって、実例からは判断することが難しい。ただ、「でも」というとりたて助辞が成立していることから、「できえ」もそれと同じように、ひとまとまりのとりたて助辞とみたほうがよいのではないかとも考えられる。このことについては今後さらに考察する必要がある。

- (49) どういう手入れが効を奏したのか於継の髪は染めたように黒く、一筋の白毛も見えなかった。おそらく白いものは丹念に髪をわけて探し、見つければその都度ひき抜いていたのだろうと思いつつも、加恵のように三十歳半ば[できさえも]数本の白毛は抜いても抜いても生えてくるのに、美しい女というものは髪まで齢をとらないものなのかと内心忌々しく思いつつも驚嘆していた。(華岡青洲の妻)

- (50) 社会というものはいつの時代にも、大人たちのものだった。大人になりきらない青年たちにとっては、一種の違和感がある。肌になじまない窮屈さがある。三宅はそれを政治のためだと考え、資本主義が悪いからだ論じていた。裏街の居酒屋で酒を飲んでいる時^{でさえも}、そのことを誰かに咎められはしまいかという警戒心があった。(青春の蹉跎)

2.6.7 からさえも

格助辞「から」+係助辞「さえ」+係助辞「も」の形で「からさえも」になる。

- (51) 彼は、一刻も早く自分の過去から逃れたかった。彼は、自分自身^{からさえも}、逃れたかった。まして自分のすべての罪悪の萌芽であった女から、極力逃れたかった。(恩讐の彼方に)
- (52) 彼が、これに参与して、この企てが失敗するならば、彼は、今まで三年間、全力を傾倒してそれに向かって進んだ高等海員どころでなく、下級船員^{からさえも}その職業的生命を奪われることになるのであった。(海に生きる人々)

2.6.8 からまでも

格助辞「から」+係助辞「まで」+係助辞「も」の形で「からまでも」の組み合わせがみられるが、実際に用例では「からまでも」の一例しかあらわれなかった。

- (53) それ以来、どうも、おれは水夫たちの仲間^{からまでも}受けがよくない——と、さびしそうに、ストキは考えた。(海に生きる人々)

2.7 副助辞+格助辞+「も」

副助辞+格助辞+係助辞「も」の形で組み合わせが見られる。

2.7.1 ほどにも

副助辞「ほど」+格助辞「に」+係助辞「も」の形で「ほどにも」になる。

- (54) ようやく今日これから隊に入れるのだ。別れてからもう三月^{ほどにも}なるが、そのあいだに、ずいぶんいろいろなことがあったなあ——。(ビルマの豎琴)
- (55) 父親が、早く亡くなり、宮仕えどころか、今は親子^{ほどにも}年のちがう、一介の受領(諸国の長官)の後妻になってしまったのを、その女はどう思っているのだろうか。(新源氏物語)

2.7.2 だけにも

副助辞「だけ」+格助辞「に」+係助辞「も」の形で「だけにも」になる。

- (56) 彼の超然とした態度はたとい外観^{だけにも}せよ、敬服に値すべきだと私は考えました。(こころ)
- (57) 試みに君が武蔵野《むさしの》辺の緑を見た眼で、ここの礫地《いしじ》に繁茂する赤松の林などを望んだなら、色相の相違^{だけにも}驚くであろう。(千曲川のスケッチ)

2.7.3 だけでも

副助辞「だけ」+格助辞「で」+係助辞「も」の形で「だけでも」になる。格助辞「で」

+「も」の形についてはすでに述べた通りであり、用例(58)と(59)の場合も同様に、格助辞「で」+係助辞「も」との分析ができる。なお、例(60)は、「も」をとりはずすことができないため、とりたて助辞「でも」によるとりたて形式であると判断される。

- (58) 第一次大戦後の、我が国が好況の波に見舞われている時で、ハーヴァード^{だけでも}日本人留学生が七十人からおり、山本に関する色んな逸話が伝えられているが、それは後にゆずるとして、彼がメキシコの石油を見に行った話だけを書いておこう。(山本五十六)
- (59) そうしたら一体どうするのか？ 兵力の分散^{だけでも}一大問題で、航空隊を満洲へ移すどころの沙汰ではなくなって来る。(山本五十六)
- (60) 時計は遅れているのより進んでいるほうがよいし、物事も早ければ早いほどいい。結婚は将来でもよいとして、とりあえず婚約^{だけでも}させましょう。(楡家の人びと)

2.7.4 ばかりにも

副助辞「ばかり」+格助辞「に」+係助辞「も」の形で「ばかりにも」になる。ただ、実際の用例では「ばかりにも」の組み合わせは一例しか現れなかった。

- (61) 彼女はそういう借金の言訳^{ばかりにも}、疲れた。そればかりではない、月々の生活を支《ささ》える名古屋からの送金は殆《ほと》んど絶えて了《しま》った……(家)

2.7.5 などをも

副助辞「など」+格助辞「を」+係助辞「も」の形で「などをも」になる。

- (62) ……つまりギリシャはね、人間を信仰したんだ。まず神々を信仰し、次いで神々を創った人間を信仰し、最後には人間の創った法律や芸術や哲学^{などをも}信仰したんだ。(第一の手帳)
- (63) こんなことまで叔父に打開けて、濟まないとは思いつつ、耳を塞《ふさ》いで、試験の仕度《したく》した事^{などをも}語った。話せば話すほど、お俊は涙が流れて来た。(家)

2.7.6 などにも

副助辞「など」+格助辞「に」+係助辞「も」の形で「などにも」になる。

- (64) 見かけは冴えないのだが、割合女子社員^{などにも}好かれているのは、部長だからといって、偉ぶった態度を取らないせいもあるだろう。(女社長)
- (65) モスクワの街を歩いていると、胸に大きなバッジをつけている男達をよく見かけた。夜のレストラン^{などにも}バッジをつけている連中が少なくなかった。バッジと言っても、それはかなり大きなもので、一寸した勲章のようでもあった。(風に吹かれて)

2.7.7 などへも

副助辞「など」+格助辞「へ」+係助辞「も」の形で「などへも」になる。

- (66) 駐在は電話であちこちの町や村、それにバス会社^{などへも}問いあわせてくれましたが、妻の消息はまったくわかりません。(エディプスの恋人)
- (67) 商売がらでもあるが国府津を初め、日光、静岡、前橋^{などへも}旅行したことがある

とかしゃべった。(耽溺)

2.7.8 などでも

副助辞「など」+格助辞「で」+係助辞「も」の形で「などでも」になる。

- (68) 「忍耐強い人で、議会の難壇に坐ると二時間でも三時間でも、まったく姿勢を崩さなかつたし、艦隊の会議などでも—と言もしゃべらないで終ることがあったが、米内さんはほんとうはずいぶん神経質で、黙ったままよく額のところをピリピリさせていた」(山本五十六)
- (69) 鏡の好きなお后様や裸の王様は高価な毛皮でコンプレックスをつつみこみ、欲望しかなくうつろな中身を隠してうぬぼれるしかないが、たった一枚の毛皮を身にまとっただけでうぬぼれるのは多くの人々が毛皮をもたないためだ。たった一枚の毛皮で思い上がる者は夫や子どもの地位、階級、人種などでもうぬぼれたがる。(人間の基本)

2.7.9 などからも

副助辞「など」+格助辞「から」+係助辞「も」の形で「などからも」になる。

- (70) 合田はそういってプラスチック成型業者からとった概算見積書の伝票を重役にわたした。私はその手まわしのよいのに呆れた。ほかに玩具製造店や作業衣業者などからも彼は見積りをとっていた。(巨人と玩具)
- (71) 「いやいや、そこがむずかしゅうござる。安公卿などからも縁談がないことはないのでござりまするが、御当人は、うちはいったん仏門に入ろうとしたものゆえ、——とかぶりを振りなされ、世に出ようとはなさりませぬ」(国盗り物語)

2.7.10 なんかにも

副助辞「なんか」+格助辞「に」+係助辞「も」の形で「なんかにも」の組み合わせが見られる。この組み合わせも可能な組み合わせのパターンであるかどうか、実際の用例が一例しかないため、明確にすることができない。

- (72) 「家は私立病院なのだから。むかしは一人脱走があったというだけで、ずいぶんと警視庁がやかましかった。私立と官立とでは同じように考えてはならない。手に余る患者さんは無理に入院させる必要はないよ。そういうのは松沢にまわして……もともと君が決めるわけではないんだが、菲沢君なんかにもそのように伝えてくれ給え」(楡家の人びと)

2.8 他の係助辞+格助辞+「も」

他の係助辞+格助辞+「も」の形で組み合わせが見られる。調べた限りでは、「さえをも」、「までをも」、「までにも」3つがあらわれた。

2.8.1 さえをも

係助辞「さえ」+格助辞「を」+係助辞「も」の形で「さえをも」になる。

- (73) わが子さえをも無視するこの崇高な魂にとっては、その夫がどのようにして敗戦後の混乱した国で慰みとはほど遠い生活を送ってきたかということなど、もとより眼中にないにちがいがなかった。(楡家の人びと)

- (74) 湧き起りおし寄せ周囲をどよもす爆音が、小さな思念「さえをも」吹きとばした。ただひたすら単純に圧倒的に、ぐっとこみあげてくる生々しい、そのくせ堅くこわばった原始的な感情があった。(楡家の人びと)

2.8.2 までも

係助辞「まで」＋格助辞「を」＋係助辞「も」の形で「までも」になる。「まで」については、限界をあらわす格としての「まで」と、係助辞としての「まで」とがある。本稿では、以下の例(75)、(76)の「まで」をとりたて助辞の「まで」として捉えることとしたが、限界をあらわす格助辞「まで」の特殊な用法とも考えられる。二つの用法について、なんらかの関連性があると考えられるが、これについてはさらに詳細な考察を必要とする。この後にみる「までにも」についても同様である。

- (75) こういう意識と反省が、ほんの一瞬の間に、めまぐるしく桃子の頭のなかを、その小肥りした肉体の隅々「までも」駆けめぐった。そして彼女は泣いた。ほしいままに泣いた。(楡家の人びと)
- (76) この町が、エーゲ海からダーダネルス海峡を通過してマルモラ海に抜け、そのまま北上してコンスタンティノープルに通ずる要地を占めるだけに、奪い取られた側のビザンチン帝国だけでなく、そこを通過してコンスタンティノープルや黒海沿岸の諸都市との交易で繁栄していた西欧の海洋国家「までも」、刺激せずにはすまなかった。(コンスタンティノープルの陥落)

2.8.3 までにも

係助辞「まで」＋格助辞「に」＋係助辞「も」の形で「までにも」になる。実際の用例では一例しか現れなかった。

- (77) もうじき梅雨明け宣言が出されるとのことですが、もう家の中ははじめじめして、壁も畳も廊下も、ドアの把手「までにも」、黴が張りついているような気がいたします。(錦繡)

2.9 他の係助辞＋「も」＋格助辞

他の係助辞＋「も」＋格助辞の組み合わせが見られる。調べた限りでは、「さえもが」、「までもが」があった。「さえ」「まで」について、研究の過程で調べあげた事例に「さえが」、「までが」の組み合わせがあった。係助辞は格助辞のまえにつけることができないとされているが、このような用例から「さえ」、「まで」は係助辞として振る舞いながらも、副助辞的な特徴をもつと考えられる。「さえもが」、「までもが」についても同様に説明できるかもしれない。

2.9.1 さえもが

係助辞「さえ」＋係助辞「も」＋格助辞「が」の形で「さえもが」になる。

- (78) 錨をいかに早くあげるかで、航海技術の優劣が評価できるのだが、その時も、地中海世界第一とヴェネツィア人「さえもが」認めるジェノヴァの船乗りの能力を、まざまざと見せつける結果になった。(コンスタンティノープルの陥落)
- (79) 私はそういう自分自身の立つ位置「さえもが」——あの芸術家の言い草ではないが、いつのまにか墓地のような気のして来たことを胸に浮かべてみた。(嵐)

2.9.2 までもが

係助辞「まで」+係助辞「も」+係助辞「が」の形で「までもが」になる。

- (80) 病院の人々すべてが、精神病者の一部^{までもが}、その千人針を一針ずつ心をこめて縫った。大きな日の丸の旗に記された武運長久の文字のまわりにこぞって署名をした。
(楡家の人びと)
- (81) 本屋で平積みになっている雑誌は、どれもこれも、広告だらけの分厚い雑誌ばかり。コンピューター会社が発売しているだけなら許そう。だが、新聞社^{までもが}似たり寄ったりの雑誌を次から次へと出している。(スレイヴ)

3. まとめと今後の課題

以上の考察の結果をまとめると、次のように整理できる。

- (1) 格助辞+「も」；をも、にも、へも、でも、とも、からも、までも、までも
- (2) 副助辞+「も」；くらい(ぐらい)も、ほども、だけでも、ばかりも、なども、なんかも
- (3) 「も」+格助辞；もが
- (4) 他の係助辞+「も」；さえも、までも
- (5) 格助辞+副助辞+「も」；になども
- (6) 格助辞+他の係助辞+「も」；をさえも、をまでも、にさえも、にまでも、へまでも、でさえも、からさえも、からまでも
- (7) 副助辞+格助辞+「も」；ほども、だけでも、だけでも、ばかりにも、などを、などにも、などへも、などでも、などからも、なんかに
- (8) 他の係助辞+格助辞+「も」；さえをも、までも、までも
- (9) 他の係助辞+「も」+格助辞；さえもが、までもが

資料の制限もあり、十分な結果を示せたとは言えないが、「も」と格助辞、副助辞、係助辞(「も」を除き)との接続について、「も」の可能な接続パターンを9種類にまとめることができ、その内実を実例から確認することができたすべてのパターンとつきあわせることで、あきらかにすることはできたと考えている。本稿では「も」を対象に考察をおこなったが、「も」だけでなく、係助辞全体の文法的特徴についても、以下に箇条書きによって示している点を中心に、今後あきらかにしていきたい。

- ・ 本稿では、格助辞「で」+係助辞「も」の形のみをとりあつかったが、それ以外に係助辞「でも」によるとりたて形式と、コピュラ「だ」の連用形を「も」によるとりたて形式がみられた。それらの関係についてはあらためて問題にする必要がある。
- ・ 「まで」について、限界をあらわす格としての「まで」と、係助辞としての「まで」とがある。とくに名詞格のとりたて形式において、両者は外形上同様であるため、判断が難しい。ただ、この二つの用法についてつながりがみられるため、両者には関連性があると考えられる。
- ・ 「でさえも」について、本稿では「でさえも」の「で」を格助辞の「で」として扱ったが、この組み合わせはコピュラ「だ」の連用形が「さえ」によってとりたてられているという考えもあり、事実そのようにみられる用法もあつて、実例からは判断すること

が難しい。ただ「でも」というとりたて助辞が成立していることから、「でさえ」もそれと同じように、ひとまとまりのとりたて助辞とみたほうがよいのではないかとも考えられる。これについては稿をあらためたい。

（しゅ・ぶへい 本研究科博士後期課程）

注

- 1 とりたて副詞について、『日本語の文法』では、「文中の特定の対象を、同類の他の語とどのような関係にあるかをしめしながら、他の同類の語群のなかからとりたて副詞を、とりたて副詞とよぶ。たとえば、「ただ、君にだけ 知らせておく」の例で、「ただ」は、「だけ」とともに、知らせるあい手として「君」を、他の（表現されていない）「彼」とか「彼女」などの同類のものを排除する関係でとりたてて」と説明している。
- 2 とりたて助辞については、「とりたて形」、「とりたて詞」「取り立て助詞」などの言い方もあるが、本論文では『日本語の文法』の定義に従い、そのなかにあげられているとりたて助辞の下位分類、係助辞「は・も・こそ・さえ・しか・でも・まで・なんて」、副助辞「くらい（ぐらい）・ほど・だけ・ばかり・など・なんか・」に限定する。
- 3 「格助辞」、「副助辞」、「係助辞」について山田孝雄は以下のように述べている。
 「格助詞は体言又は副詞に附属してそれが他の語に対して有する一定の関係を示すもので、一の資格を示すものは他の資格のものには流用することの出来ぬものである。」
 「格助詞のこの性質は分りきつた事のやうであるが、実は大切なことであつて、これを基として副助詞、格助詞との区別が明になるのである。」
 「副助詞は用言の意義に関係ある語について下の用言の意義を化裁するもので、これに属するものは「ばかり」「まで」「など」「やら」「が」「だけ」「ぐらゐ」等である。
 「副助詞は主語にも補語にも修飾語にも附属することの出来るもので、格助詞の下にあるを普通とする。」
 （中略）「この種の助詞は又格助詞の上にも来ることがある。」
 「係助詞は用言に関係ある語に附いて、その陳述に勢力を及ぼすもので、これに属するものは「は」「も」「こそ」「さへ」「でも」「ほか」「しか」等である。」
 「係助詞は主として副助詞のやうに用ゐられるけれども、その支配する点は陳述の力にある。それであるからその性質によつて述語に一定の約束が生ずる。次にこれらの大部分は時として述語の下について陳述の方法に干渉することがある。」
 「係助詞が係として用ゐられる時は格助詞副助詞の下にだけあつてそれらの上に行くことがない。さうして、時には係助詞が相互に重ね用ゐられることがある。」
 「係助詞は格助詞を用ゐぬ場合にその代理をすることがある。」
 「係助詞が格助詞と同時に用ゐられる時はその下につくことは副助詞に似てはゐるが、格助詞の上には置かれることがない。これが副助詞と係助詞との区別の要点の一である。」
 「係助詞は副助詞と重ねる時には、その下にだけついて上に置かれることがない。これも副助詞との区別の要点の一である。」
 「係助詞相互に重ねて用ゐるものは多くはないが、いくらかある。」
 「係助詞の「こそ」は又接続助詞「ば」の下につけて用ゐることがある。」
 （以上の引用は『日本口語法講義』12版によるものである）
- 4 以下の各形式の用例の挙げ方について、2つ以上確認できた場合はその中から2つを、また、2つ以下の場合にはその全てを提示していくこととする。また、確認できた用例が1つのみである場合に、本文中でそのつど断っている。

主要参考文献（50音順）

- 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武（1986）『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社
 言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』 むぎ書房
 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』 むぎ書房
 高橋太郎（2005）『日本語の文法』 ひつじ書房
 高橋太郎（1978）『研究報告書Ⅰ』 国立国語研究所

寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版
宮田幸一 (1948) 『日本語文法の輪郭』 三省堂
山田孝雄 (1922) 『日本口語法講義』 宝文館

用例引用資料
CD-ROM 「新潮文庫100冊」
青空文庫